和漢比較文学　第六十二号　平成三十一年（二〇一九）二月一日発行

書評　揖斐高著『柏木如亭詩集1・2』

新稲法子

書評　揖斐高著『柏木如亭詩集1・2』

新稲法子

二〇一七年、平凡社の東洋文庫に『柏木如亭詩集1』、『柏木如亭詩集2』が加わった。五月刊行の『柏木如亭詩集1』には『木工集』五一首、『吉原詞』二〇首、『如亭山人藁初集』一〇〇首を、七月刊行の『柏木如亭詩集2』には『如亭山人遺藁』一九五首を収め、計三六六首、如亭の漢詩を一通りカバーするものだ。『柏木如亭詩集1』には解説を、『柏木如亭詩集2』には略年表を備える。

注を施したのは如亭研究の第一人者、揖斐高氏である。揖斐氏は既に新日本古典文学大系64『菠園録稿　如亭山人遺藁　梅暾詩鈔』において『如亭山人遺藁』一九五首を担当され、岩波文庫『詩本草』においても吉原詞を含む詩のいくつかに注を施しておられる。今回の『柏木如亭詩集』は、それらを上書きする、揖斐氏による如亭詩注釈の決定版といえるだろう。二〇〇八年に出版された岩波文庫『訳注聯珠詩格』と併せ、それまで容易に見ることができなかったものも含めた如亭の作品のほとんどが、揖斐氏の注釈によって広く一般の読者の元にまで届くようになったのである。

揖斐高氏が研究者人口の非常に少なかった時期から近世漢詩の研究を手がけ、今日では同分野の第一人者であることは言うまでもないが、揖斐氏をこの分野に誘ったのは富士川英郎の『江戸後期の詩人たち』であった。麦書房から一九六六年に出版された『江戸後期の詩人たち』が一九七三年に筑摩叢書に収められたとき、富士川は読者の反響を記したくだりで次のように述べている。

また、去年は、もうひとりの別の東大生で、国文学を専攻しているひとが、とつぜん未知の筆者に私信

をよこした。それによれば、その学生は或る日、国文学の研究室の書架に偶然に『江戸後期の詩人たち』を見出し、それ以後、江戸時代の漢詩人に興味を持って、いまは大学院の修士論文のテーマに柏木如亭を選んでいるということであった。

この「もうひとりの別の東大生」が他ならぬ揖斐氏であることは、つとに研究者の間では知られているところであったが、二〇一二年、東洋文庫から『江戸後期の詩人たち』が三たび出版されたとき、揖斐氏自身が解説の筆を執ってこのことを回想し、周知のこととなった。東洋文庫版『江戸後期の詩人たち』を手にした研究者、とりわけ江戸漢詩をテーマにする者などほとんどいなかった時代を知る五十代以上の研究者は、感慨を抱かずにはおれなかったのではなかろうか。

揖斐氏は柏木如亭という名をほとんどの研究者が知らなかった時代から実証的で詳細な年譜の作成と信頼に足るテキストの複製を手がけ[1]、如亭とその周辺の江湖詩社の詩風詩論について論考を重ねてこられた。如亭の詩の注釈者として最もふさわしいのは誰もが納得するところであろうが、「江戸後期の詩人たち」にまつわるこのエピソードは、学会の佳話として氏と如亭との結びつきを我々に強く印象づけるのである。

ところで、ここで江戸の漢詩人に興味を持った若き日の揖斐氏が、大学院に進学し修士論文のテーマに選んだのが柏木如亭であることは興味深い。

如亭は著名な詩人とは言い難い。近世漢詩そのものが、現在でもなお日本文学において主流の研究分野ではないことを差し引いても、例えば頼山陽の名は一般にも広く知られている。また例えば、全国的な知名度は山陽ほどではないにしても、福山における菅茶山や高槻における藤井竹外のように、郷土の偉人として顕彰活動が行われていたり、総合的な学習の時間で取り上げられたりしている詩人は少なくない。それに対して如亭は、研究者や一部の好事家を除くと、全国レベルでも、出身地東京や客死した京都でも、ほぼ知られていないと思われる。

しかし如亭は、著名ではないが熱狂的なファンを持つ詩人である。永井荷風は『詩本草』を以て江戸の随筆の白眉とし、日夏耿之介は「江戸のボードレール」と呼ん

だとされている。晩年に日本文化研究会を主催し江戸の漢詩に親しんだフランス文学者の生田耕作が最も愛したのは、地元京都を代表する中島棕隠と並んで柏木如亭であった。研究者以外にもコアなファンを持っていることは、ヤフオクで如亭の書画が出品されると異常といってよい金額まで高騰することからも窺える。

如亭という詩人が大衆に支持されるタイプではなく、一部の人たちに熱狂的に支持されるタイプの詩人であるのは、作品の叙情性はもちろんのこと、その生き方も影響するところが大きいと思われる。

同じく市河寛斎の江湖詩社で詩を学んだ大窪詩仏と如亭とを比較してみたい。詩仏は一七六七年、如亭は一七六三年生まれのほぼ同年代である。二人は寛政四年（一七九二）に詩仏が瘦梅、如亭が瘦竹と号して二瘦詩社を作って活動した。二瘦詩社は百人の門人を抱え、清新な詩風で江戸の詩壇を大いに賑わしたという。翌五年には最初の詩集として、詩仏が『卜居集』、如亭が『木工集』をそれぞれ上梓した。

詩人として同じスタートラインに立ちながら、二人の以後の生き方はまったく異なっている。江戸に留まった詩仏は、化政期には江戸詩壇の中心人物となった。お玉が池に構えた邸宅、詩聖堂には訪問客が絶えず、芸者を呼んで八百善から仕出しをとるという華やかな暮らしぶりだった。代表的な詩集である『詩聖堂詩集』も初編から三編まで、これらとは別に『西遊詩草』『北遊詩草』『再北遊詩草』といった紀行集も出版された。人気に陰りが見えた晩年も、秋田藩に出仕して生活を維持することができた。

これに対して如亭は小普請方大工棟梁を三二歳で辞職して江戸を離れ、遊歴の詩人として生涯を送った。文化七年に『如亭山人藁初集』を刊行したが、これは『詩聖堂詩集』のように二集三集と続くことはなかった。如亭の詩集が次に上梓されたのは、没後に梁川星巌が尽力した『如亭山人遺稿』である。もし詩仏のように江戸に留まっていれば、器用に生きることができていたら、『如亭山人藁』の二集三集を読むことができたのではないかと恨みに思われる。

とはいえ詩仏が特に処世に長けていたのではない。都市部で華やかな書画会を開いて揮毫して稼いだり、身分と収入の確保を求めて仕官活動をするのは当時の文人と

しては当然のふるまいである。現代の研究者である我々は、作品の向こうに生身の人間である作者の現実的な営為があることを知っている。近年では、金文京『李白漂泊の詩人　その夢と現実』[2]が、豪放磊落、天衣無縫の詩人としてイメージされる李白の実像を明らかにしたものとして記憶に新しい。

如亭とて、家職を弟に譲ったとき、これからの生活の見通しは立っていたのであろう。地方を遊歴しながらも如亭は如亭なりに生計を考えていたのであろう。そしてその生活はある時期までは孤独よりも快楽が勝っていたと思われる。如亭と越後を旅した新楽間叟の『間叟雑録』[3]には、「痩竹は今年三十八歳なれ共、妖冶の風にて殊更美少年の容貌也。廿四五歳の如し。ゆく所として色をもってあやまらざるはなし」と如亭の姿を伝えている。『間叟雑録』にはまた次のような如亭の言葉も記されている。

我と足下と他邦の雲水なり。いかなれば、妓女并良家の婦人といへども土地の豪族とならべ称して、しかも慇懃を通ぜり。凡婦人として富にこび貴人にへつらはざるはなし。しかるに四方に托鉢して口を人に仰ぐものにおひて、なんぞかれが真情によろこぶものならんや。何ともがてんのゆかぬ事なり。

これを受けて間叟は「越婦」は「真に才を愛し学士を愛する」からだと答えている。漂泊の詩人と地方の女性の真情、白居易の「琵琶行」を彷彿させるような状況を、まだ三十代の如亭は楽しむ余裕があったのだろう。「何ともがてんのゆかぬ事なり」という言葉は、俺たちどうしてこんなにもてるんだろうという惚気にも読めてしまう。

しかし、このような生活にはいつか終わりが来る。どこかで着地点を見つけて人生の辻褄を合わせなければならない。そして如亭はうまく着地点を見つけられなかった。五七歳という人生は長くはないが、老いを自覚し、病を抱えて遊歴を続けるには長すぎた。最終的に京都で詩稿と僅かな文房具のみ遺して亡くなったことは、若い世代の頼山陽や梁川星巌を震撼させた。

生活よりも芸術を優先して破滅に向かうようなことは、いつの時代も極めて数少ない、ごくごく一部の者がうっかりやらかしてしまうたぐいのことだ。掛斐氏によって

詳細に明らかにされた如亭の生涯を知った上でその作品を読んでいると、如亭はこのやらかしてしまった一人ではないかと思われてならない。

私たちが如亭に惹かれるのは、その作品世界の叙情性だけでなく、こういった生き方、およそ芸術を愛する者すべてが、憧れはしても現実には不可能な生き方に対する憧憬も、与るところが大きいと思われる。

その意味では柏木如亭というのは永遠の青春の詩人であり、失われた青春を懐かしむ世代だけでなく、今まさに青春にある若い世代にこそ読まれるべき詩人である。掛斐氏の註釈によって、漢文に馴染みの薄い若い世代にも如亭という詩人を知ってほしいと思うのである。

とはいえ、芸術に殉じたこの詩人に対する愛惜の念が研究者としての目を曇らせるようなことはあってはならない。本書以前に如亭の詩に註釈を施した入谷仙介氏による『日本漢詩人選集8柏木如亭』[1]は、そのことに気付かせてくれたものである。入谷氏は第四章「柏木如亭について」において「ダンディーでグルメなプレイボーイ、知性と感覚の放蕩にふける、デカダンスな漂泊の詩人、そうして悲惨な最期という如亭像のデッサンは富士川が作り出した」といい、如亭を「呪われた詩人」として読書界に紹介したのは富士川英郎で、それを読書人の常識としたのは中村真一郎だと述べている。

柏木如亭研究の流れの中で、入谷氏の注釈は、研究対象への過度な思い入れが客観的な視点を見失わせることを誡めるものであったといえよう。同年の中島貴奈氏の「柏木如亭詩論――「清新」の方法――」[2]も、如亭のイメージに引きずられることなく着実に典拠を指摘したものであった。

富士川英郎や中村真一郎によってピークに達した如亭のイメージが、入谷氏や中島氏によって修正されるという研究史の流れの先にあるのが本書だといえるだろう。

本書には如亭の詩集が「木工集」、「吉原詞」、「如亭山人稾初集」（以上「柏木如亭詩集1」）、「如亭山人遺稾」（「柏木如亭詩集2」）と時代を追って収められているが、「解説」（「柏木如亭詩集1」）にある「如亭詩の特色やその変化」を以下にまとめておきたい。なお、それぞれの詩集の下にある数字は全三六六首の通し番号である。

【第一期・青年期】
江戸で小普請方大工棟梁として幕府に出仕していた時期。三十二歳の寛政六年（一七九四）まで。
「木工集」「吉原詞」1～71
テーマ　青春の抒情

【第二期・中年期】
小普請方大工棟梁を辞職し、信越地方への遊歴に出かけた後、江戸に戻って職業的な詩人として活動した時期。三十三歳の寛政七年（一七九五）から西遊に旅立つ四十五歳の文化四年（一八〇七）まで。
「如亭山人藁初集」72～171
テーマ　旅情と山水の発見

【第三期・初老期】
西遊に旅立った四十五歳の文化四年から、西遊を切り上げて江戸に再帰し、短い江戸滞在の後、再び遊歴に発つ五十三歳の文化十二年（一八一五）の四月初旬まで。
「如亭山人遺稿」前半の詩172～294
テーマ　旅の孤独と老いの自覚

【第四期・老年期】
江戸を発って上信越一帯を遊歴し、その後再び京都に戻り、四国や伊勢・伊賀などを遊歴したのち京都で客死するまで、すなわち五十三歳の文化十二年四月初旬から五十七歳の文政二年（一八一九）七月まで
「如亭山人遺稿」後半の詩295～366
テーマ　歎病と病苦と望郷

ここで本書の特色として、二つのことを指摘しておく。
一つは、典拠の所収テキストとして、如亭が関わった書物が引かれていることである。
漢詩の註釈において最も大切なのは典拠を示すことであろう。優れた漢詩というものは、表面的な美しさだけでなく、典拠の世界を踏まえて重層的に味わうものである。
そして注釈に当たって典拠を記す際は、どのテキストによるかが問題になる。例えば白居易の詩の場合、最善

のテキストとされる那波本の『白氏文集』にするのか、作者が生きていた時代に流布していた和刻本の『白氏長慶集』にするのか。『和漢朗詠集』所収の句ならそれにするのか。注釈の段階で作者が見たテキストをすべて確定するのが不可能であることを考えると、書名は省くというのも一つの見識である。

本書の場合、詩の典拠は原則として詩人の名と詩句のみであるが、『聯珠詩格』所収作の場合はそのことが記されている。言うまでもなく『聯珠詩格』に関しては如亭に『訳注聯珠詩格』という書物がある。また、如亭編『宋詩清絶』所収のものであればそれについても記している。これにより、読者は如亭の創作の跡を辿ることができるのである。

二つめの特徴は、実作者の目配りが利いていることである。

短歌や俳句であれば、学校教育でも一度は作る機会があり、趣味で詠む人たちも多い。和歌や俳諧の注釈にあたってはその経験が役立つこともあることと思われる。しかしそのような状況にない漢詩については、実作者から見ると見当違いであることに容易に気付く誤りを犯していることがある。

その点、本書は「あとがき」（『柏木如亭詩集2』）によると、現役の漢詩人である山口句氏による有益な指摘が少なからずあったという。2「冬日食河豚」で「西子乳」について、「平仄の関係で「施」の字は使えないので、「西子」とした。」とあるように平仄に目配りが利いていることなどからも、実作者の協力を伺える。

「あとがき」にはまた、揖斐氏が成蹊大学大学院の演習授業で如亭の詩集を読むことにし、二年間の授業で『木工集』と『如亭山人藁初集』を読み終え、『如亭山人遺稿』に少し入って時間切れになったと述べておられる。

稿者も学部生だった一九八〇年代、黒川洋一先生と如亭の作品を読むという機会に恵まれ、同じく二年間で『木工集』、『如亭山人藁初集』と読み進み、『如亭山人遺稿』の途中まで読んだ（『詩本草』も読んでいる）。

しばらく私事を記すのを許されたい。当時、黒川先生は江戸漢詩に興味を持っておられ、一緒に江戸の詩人を読みたい人がいたら読んであげますよと授業で話しておられた。外国文学を専攻するつもりで漢文や中国語の勉

強をまったくしていなかった私は、中村真一郎の『江戸漢詩』[3]に感動したところだったというだけで、無謀にも先生の呼びかけに応じたのである。

先生のご苦労はいかほどだったかと偲ばれるが、『江戸漢詩』が「古典を読む」のシリーズで世に出た一九八五年、まったくの素人に一から漢詩の読み方を身につけさせるため、先生がどのようになさっていたかをこの機会に記しておくのも何かの役に立つのではないかと思う。

先生はまず、辞書（字書）をむやみに引くのを戒められた。引くのは最小限にしなさい、この意味に違いないという段階になってから引くのだとおっしゃった。

次に典拠だが、基本的に有名な漢詩は諳んじていて当たり前と思っておられたようだった。諳んじていない私は「大漢和辞典」や『佩文韻府』で見つけられなければ『唐詩選』や『三体詩』、如亭の場合は『聯珠詩格』を必死に見るしかなかった。

そういうものにすぐ出てくるわけではない典拠についてはどうするか。索引の存在を教えてくださるわけでもなかった。めったに使われないのか、私は先生が索引類を使われるのを見たことがない。どうするのかというと、典拠がありそうなものに当たりをつけて、ただひたすら読むのである。

当たりを付けるといっても、膨大な漢籍の世界でどういうものを見ればいいのか私にわかるはずもない。典拠がありそうな詩語が出てくるたびに、先生は「あれにあるのではないかな」とおっしゃるので、翌週までに探してくる、の繰り返しだった。具体的な書名を挙げられても、何巻のどの辺りにあるということまではわからない。もしかすると先生の記憶違いで、ないかもしれない。抱えきれない分厚い本を前に「こんなにありますが……」と言っても、先生は「ざっと目を通すだけだから」と、こともなげにおっしゃった。ちなみに、現在のようにパソコンを使っての検索もできなかった時代、索引も備わっていない書物をひたすら読んで典拠を探すことはふつうのことで、私たちは「地獄引き」と呼んでいた。

何とも心許ないことであったが、しかし、繰り返しているうちに、なんとなくこういう典拠はこういう本にありそうだというのがわかってきた。当時の大阪大学は懐徳堂文庫を含む書庫の漢籍コーナーに比較的自由に入れた。懐徳堂文庫蔵本の中には文学関係の和漢書が充実し

ている岡田文庫（岡田伊左衛門氏旧蔵書）があった。往年の知識人が持っていた書物というものを具体的に目にすることができたのも幸いした。

当時のノートと本書を照らし合わせて読んでみると、漢詩の世界の右も左もわからなかった自分がやっと見つけた典拠がことごとく記されている。掛斐氏の授業に参加した大学院生たちは、かつての稿者とは違って有名な漢詩は諳んじているだろうけれど、それに加えてインターネットや検索ソフトを駆使して軽やかに典拠に辿りつくのであろう。本書が出版されたのち、黒川洋一先生と読んだときのノートはもはや不要となり、そのほとんどを処分した。

しかし、大きく解釈が異なる部分については遺している。長々と思い出話を記したのは、これらは黒川先生が「あれにあるのではないかな」と当たりを付けられて典拠を探したものだという傾向があるからである。ピンポイントで確実に探し出せる現代と、地獄引きをしていた三〇年前とでは、カバーできる典拠が異なるのかもしれない。どちらが良いという問題ではないし、最終的に到達するところは同じだと思うが、いまはここに二つの例を記しておきたい。

一首めは3「寄滕生　滕生に寄す」の転句・結句「世情　解さず　幽情の足るを　酔倒す　黄公酒壚の辺」についてである。本書は「世間の人は僕の心に鬱積している思いを理解してくれない。それで僕は酒をあおり、居酒屋の傍らで酔いつぶれてしまうのだ」と解釈している。

しかし、「世情不解幽情足」の句は「世情」と「幽情」が句中対になっているから、「世情」の「不解」の対象が「幽情足る」だと対の構造が崩れる。「世情不解」を世間の人、「幽情足」を如亭のこととするのなら、本書の解釈の意味にするためには「情」を摘えず「世人不解幽情足」とでも詠むべきである。「情」「人」は共に平声であるから平仄の問題はない。「情」にしているのは「世情」と「幽情」が対だからであろう。

「世情・不解」と「幽情・足」を句中対とし、どちらも如亭を主語としてとらえれば、「世情」は春真っ盛りに品川の御殿山という行楽地に集まっている世間の人たちのような浮き立った気持ちであり、如亭はそんな気持ちになれず、反対に「幽情」、鬱々とした気持ち、ここ

では過去を追憶する気持ちでいっぱいなのだということになる。

なぜ「幽情」が懐旧の気持ちになるのかというと、結句に「黄公酒壚」を用いているからである。「黄公酒壚」は『世説新語』傷逝に出てくる言葉で、王戎がかつて阮籍や嵇康と飲んだ居酒屋の前を通って懐旧の念を催した故事による。

如亭は御殿山にやってきて、かつての行楽を思い起こしたのではないか。当時飲み交わした人々とは疎遠になっていて、既に世を去った者もいたのかもしれない。滕生はいかなる人物かわからないが、その仲間の一人であろう。

本書では「酔倒黄公酒壚辺」について「酔倒黄公旧酒壚」というよく似た句があることが記されている。この「『聯珠詩格』巻十五に収める唐の陸亀蒙の「酒醒む」詩」が「和襲美春夕酒醒　襲美の春夕酒醒に和す」と題し、皮日休の「春夕酒醒」に和したものであり、陸亀蒙が酔倒した皮日休を介抱したことを詠んでいるのを如亭が知っていたならば（『訳註聯珠詩格』を記した如亭が知っていた可能性は高い）、酔いつぶれたのは滕生になり、如亭が介抱したのかもしれない。

したがって、ここの解釈は「僕は行楽地で浮き立つ人たちの気持ちはわからない。反対に昔を懐かしむ気持ちでいっぱいなのだ。あのとき、君は酒屋で酔いつぶれてしまったよね」ということになるであろう。世間の人が鬱積する思いを理解してくれないといって酔いつぶれてしまうという解釈は、第一期、青年期の作品が憂鬱や倦怠に彩られているということに引きずられているのではないかと推察される。

二首めは15「夕落花　夕の落花（和歌題なので「夕に落つる花」か）」の転・結句「風刀晩に向ひて更に厳酷幻し出す女兵の令に違ふ時」についてである。本書は「鋭い刀のような寒風は夕暮れ時になるといっそう残酷に吹きつけるであろう。そうなれば、残りの花も散り尽くして、まるで女の兵士が軍令に違反して処刑される時のような姿を、幻のように現すことになろう。」と解釈している。「女兵」については「唐の玄宗皇帝が侍女を二組に分けて花の枝で戦わせたという花軍の故事を意識する。」と注しているので、「開元天寶遺事」巻四「風流

陣」とそれに基づく日本の「花軍」を典拠として解釈していると考えられる。

しかし、この典拠は花軍ではなく、『史記』第六十五の孫子列伝ではないだろうか。孫子が呉王闔廬に謁見したとき、闔廬は宮中の女性を兵にすることができるかと試した。孫子は訓練を始めるが、みな笑って真剣にしようとしない。そこで呉王の寵愛している隊長二人を斬ると、兵として機能するようになり、呉王は孫子を呉の将軍にしたという話である。

転句は「風刀晩に向ひて更に厳酷」とあるから女兵は斬られねばならないが、『開元天寶遺事』「風流陣」には「敗者罰之巨觥」とあり、花軍も罰杯を命ぜられるのであって刀は出てこない。孫子列伝であれば実際に寵姫が斬られている。

また孫子列伝には「之に令して曰く」「三令五申す」「申令熟せざる」という表現があって、この「令」に従わなかったため斬られたのであるから、結句の「幻し出す女兵の令に違ふ時」と符合するのである。

以上二首のみ取り上げたが、一つだけ付け加えると、これ以外に黒川洋一先生は、例えば10「和菅伯美将赴野火留邑見別之作　菅伯美の将に野火留邑に赴かんとし別れらるるの作に和す」の詩題について、「見別」という表現は中国の漢詩にはない、「送別」の誤りではないかなどと、和習に拘られた。日本漢文学の注釈については、このような和習の指摘も記されていればよいかもしれない。

以上、見当違いのことを書いていたら不勉強をお詫びしたい。

本書が柏木如亭研究における頂点であることは間違いなく、今後本書で用いられている作品の通し番号、および第一期から第四期という分類が用いられていくことだろう。

「解説」によると、如亭の漢詩は本書所収の三六六首の他に、揖斐氏ご所蔵の写本を含めてまだ六五首が残っている。如亭ファンとしては本書の拾遺集としてこれらの詩にも訳註が施され、完全版の柏木如亭集ができあがることを願っている。また、猪口篤志が見たという約一〇センチの厚さの如亭自筆稿本[7]が、現在も失われずにど

こかに眠っていて、いつの日か発見されることにも希望を繋ぎたい。

【注】

(1) 揖斐高編『柏木如亭集』近世風俗研究会・太平書屋、一九七九年。なお『柏木如亭詩集1』『同2』の定本はこの覆製本である。

(2) 金文京『李白　漂泊の詩人　その夢と現実』岩波書店、二〇一二年

(3) 新楽間叟『間叟雑録』無窮会図書館平沼文庫蔵写本

(4) 入谷仙介『日本漢詩人選集8柏木如亭』研文出版、一九九九年。

(5) 中島貴奈「柏木如亭詩論―「清新」の方法―」『国語国文』68巻12号

(6) 中村真一郎『江戸漢詩』古典を読む20、岩波書店、一九八五年。同時代ライブラリー―古典を読む332、一九九八年。

(7) 猪口篤志編『日本漢詩』上巻　新釈漢文大系45、明治書院、一九七二年。

(二〇一七年五月・七月刊　平凡社　302・308頁　二九〇〇円＋税)

(にいな　のりこ・佛教大学非常勤講師)